

DRAMA かながわ 51

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866

2008年度神奈川県演劇連盟総会



2008年度神奈川県演劇連盟総会が、4月13日横浜山手のゲート座で約50名の参加者のもと開催された。

日本の演劇発祥の地とも言えるこのゲート座での総会の初の開催は、我々がもう一度自らの活動を見直すのにふさわしい場所だった。

しかしながら総会は、活動の報告や承認などに時間をとられ、なかなか議論の時間が取れないのも事実である。

そんな中でも横田理事長をはじめ、今の我々の活動の成果と重要性を表す発言も多くあった。

● 横田理事長の所信表明 ●

冒頭に横田理事長は3月23日。世界演劇祭と演劇博覧会の両方の打ち上げに参加して感じたことを語った。ここでは違う年代の人達が別々に熱い思いを語っている、両方が芝居に対する熱い思いを語っているのに、別々に別れて語っているのはおかしい。演

劇連盟は両方が共に語る場所ではないだろうか。

そして、長年県に要望してきた神奈川県芸術劇場は、4つのスタジオと呼ばれる空間をはじめ期待できる劇場に近づきつつある。県連としてはこの劇場に積極的にアプローチしていきたいが、果たして県連にそれに耐える力があるのだろうか。

神奈川県演劇連盟は何の為にあるのか、なぜ今必要なのかそれを今後考えていきたい。

● 昨年度の活動報告 ●

この後昨年度の活動報告にはいるが、改めて青少年センターに係わる行事の多さを感じる。

まず県連演フェスティバル担当勝崎副理事長より、多目的プラザ連続公演と大ホールでの合同公演について。劇場確保の難しい中とても大きな支援であり、今後も続いてほしい。そのためには、内容や社会的にも良いものを作っていかなければならない。

演劇博覧会は関口実行委員長に代わり横田理事長から。今回初めて応募団体が多く抽選に、結果14団体、動員のべ2245名。そして、参加団体から連盟に興味をもつ団体も出るなど成果があった。

芝居塾担当、にゅーくりあ坂下代表。センターの協力で裏方の勉強や、高校生同士の交流なども出来た。問題点もあったが次に引き継ぎたい。

演劇資料室は荒井氏に代わり事務局山元氏より、ボランティアの方に色んな入力作業などお願いしている。県連からの予算でなるべく誠意ある環境を目指して対応。第二資料室はなるべくフットワークの良い場所という要求をだしている。

世界演劇祭は団氏より。3回目の今回はドイツから子供も楽しめる作品を持ってきたが好評だった。収支はゼロ、赤レンガは高いが助成と実行委員の手弁当で成立。

馬場事務局長からは、要望書活動については会場の指定管理者制度上の問題の解決や、資料室分室、ボランティア経費、世界演劇祭の継続支援など。

連盟の活動報告では、理事会への理事でない人への多くの参加を呼びかけた。

● 今年の活動予定 ●

引き続き今年の活動報告に入ったが、青少年センターでの合同

公演の担当劇団はかに座。連盟各劇団の協力は必須。

演劇博覧会は音響、照明、舞監をはじめとするスタッフが不足。ドラマ神奈川は劇評の中身を濃くしたい。印刷は印刷会社に委託することが決定。

世界演劇祭、今回は3劇団ぐらい呼びたい。行政への対応をしっかりやりたい。

芝居塾はG/9プロジェクトが担当。ビデオで記録を残す。開かれた稽古場、見学を歓迎。

この後ゲーテ座の館内見学を行い交流会に移った。各劇団の活動の報告や演劇談話に花が咲き短い時間だったが大いに盛り上がった。

演劇連盟所属の劇団員が集まる少ない機会の総会。新しい顔ぶれも増えたが、色々な事情で劇団の活動に参加出来なくなる人も増え、見られなくなった顔も。

この数倍の連盟所属の劇団員がいることも思えば、もっと参加者が多くなると連盟も盛り上がるのだろうと思う。

今連盟が取り組んでいる企画は派手ではないが、実りの多い企画ばかり。どんどん新しい顔ぶれの参加を望む。

これらの活動は、今我々の抱えている問題の解決の糸口になるはず。演劇連盟は何の為にあるのか、なぜ今必要なのか。それぞれが考える時だ。

〈織田裕之〉

★総会参加者の声をピックアップしました★

風雲カボチャの馬車 土井：演博に参加した、連盟の方に支えてもらい学ぶことが多かった。

遠藤：初めて参加し総会という場があることに驚いた。こういうことを踏まえてきちんと活動していきたいと思った。

高津：いろいろな芝居を見させてもらっているが、今芝居がピンチになっていると感じずにはいられない。自分たちの中で終わらず、よその劇団の芝居をちゃんと観よう。危機的状況であることを自覚することが必要だとおもう。

岡田：普段の稽古ではなかなかこういうこと（県演連の活動など）を知らされていないので、参加できて嬉しかった。

小劇場 飯田・三浦・荒木(新人)：初めて参加しました、幸せでした。

蒼生樹 海老名：劇団が危機的状況にあるのはどこも同じだが、頑張っていきたい。

にゅーくりあ 坂下：昨年の「芝居塾」で皆パワーを使い枯れ果ててしまいお休みをしている。夏ごろ復帰の予定。

G/9プロジェクト 吉田・藤井：神奈川県内で、こんなに広い年齢層のひとが、長年にわたって芝居を続けていることが奇跡的だと感じている。今回は「芝居塾」を担当。県演連の皆さんにも是非協力してもらいたいと思う、稽古場を皆さんに発信するので、芝居塾の稽古に参加してほしい。

ひこばえ 村上・儀間：32名の団員のうち4名だけが大人。小4から団員がいる。うちの正式名称は地域演劇教育集団「劇団ひこばえ」です。昨年は「芝居塾」に4人出られてよかった。蒼生樹に客演、団さんのにも客演させてもらった。よく「他劇団の芝居を観よう」と言われるが、うちは「他劇団の芝居に出よう」と教えているので、未来になう若者

を育ててもらいたい。今日の総会に参加して(村上)：演劇と社会を結ぶことのできる集団、活動であると思っているので、今後もよろしくお願いします。

儀間：ひこばえの中では年長の私も、ここに来るとずっと年上の人もいるので、まだまだ先があると思った。

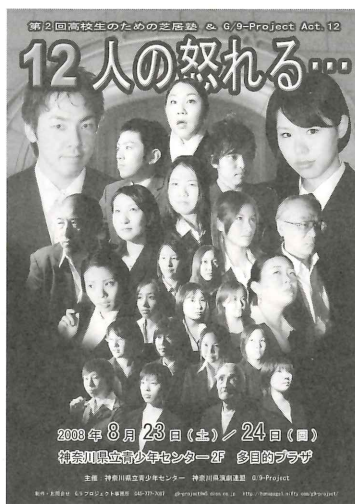
鈴村：河童座では一番長く活動をしている。横田さんのお父さんの後輩。57年間芝居をやっている。プロダクションに所属して、再現VTRなどのタレントの活動も。

ささく座 高橋・樋口：平塚には芝居をする会場がとても少ない。ちょうどいい大きさの会場もない。そんな中でも「市民演劇フェスティバル」は七回目を数えるようになった。県演連に入ったのは、集客のことも大きい。自分もたくさんの芝居を見ようとしているがなかなか忙しくて観られないことも多い。そういうことは皆同じだろうから、選ばれて観てもらえるようになっていきたい。総会では、いろいろな意見が活発に出てすごいなあと思った。

こゆるぎ座 関口夫妻：今日は11月に行う公演の脚本選択会議を行っているため一人で参加した。劇団として歴史があり、「伝統を引き継ぎ、引き渡す」という課題があるが、それだけでは維持ができない事もあるのではないかと感じている。ほかの皆さんがどのように活動をしているのかも参考にしたい、ご意見なども伺いたい。

団のぼる：理事会では僕は嫌われていると思う。好きなことを言って、やりたいことをやっている。フリーになって自分をゆっくり見つめながらやろうと思っていたら、周りの人が仕事をたくさん持ってきてくれる。「演劇って生活に役に立つ」近頃思うようになった。個人なので、理事会では小さくなっている…。演劇を続けることで、続けながら「新しい出発ができる」そういうことが皆さんにもあると思う。

高校生のための 芝居塾



本への姿勢が体におちたかを、自分たちも共同創作者となる劇団員が把握していこうとする姿が感じられた。

次に台詞はどう覚えるのか。これはもう誰もが苦しんで格闘を繰り返しながら成り立たせていく役者最大の作業。これが入らなきゃ芝居成立しないもん。

君ならどうやって覚える、台詞暗誦法はあるの？など塾生に問いかけ、考えを導きながらG/9流を展開していく。

この作業にもさっきの平読みや音読が役に立つ。特定の役に拘らずに芝居総体を確認していることで、相手役の言葉に、台詞ではなく役としての発言をすること、用意された台詞を発するのではなく、相手と会話をするのは、用意された台詞で。全体の流れの中での役どころが見えていけば自ずと発せられる言葉が台詞になるのです。

そんなにうまくいくなら苦労はない、というのが陰の声じゃないかな。私も理論としては判るし、ウンウンと思ったけれど、実践としてのハードルは高い。そんな風に体につけていきなさい、というところだと思う。

この後、過去の上演台本を使って任意の役を振って平読みをした。座学では先ず黙読だったが、それを飛ばして本読みの実践となった。このイレギュラーがいいんだよね、芝居の場合。発声練習ではそこそこの声が出ていた塾生たちも、実践本読みとなると今一の印象。そりゃそうだよ、そんなにうまくいかならこの劇団も「発声が悪い！声が聞き取れない！」なんて言われんよ。先ずはそろりそろりと船に乗って、同乗者と心を合わせて一つ芝居の板に乗ることが肝要。まだ始まったばかり、ゆっくりじっくり掴んでいこう。

塾生、劇団員混合でキャスティングし、2組つくって全員に2ステージを経験してもらうとのこと。

既に下界は暑い夏、そこに熱い芝居塾が展開してヒートアップしたまま本番へと突っ込んでいく。

その伴走者としてしっかり見届けていこうではありませんか、県演連同士の諸君！

劇団麦の会 山元のたった2回見学のレポートでした。



第2回芝居塾が始まった。第1回の集まりは5月17日(土)塾生12人とG/9の8名の劇団員、センター館長、舞台芸術部長から県演連理事長、事務局長も顔を揃えた。塾生とG/9メンバーによる熱い季節の始まりである。

塾長(?)G/9佐藤氏の進行でメンバー紹介からこれからの日程など連絡事項を確認して静かな幕開けとなった。塾生に一人変わり種というか男子の通信制高校生が参加しており、ナンとどう見ても私より上の印象。でもメタボでもなく積極的に普通の高校生の輪に入っていったおりなんとなく羨ましかった。

G/9によれば、「稽古は全てオープンで開催し、連盟購入のビデオを活かし毎回の稽古風景を収録する。いつの稽古でも県連の誰でもが見学に来て欲しい。」とのこと、これだけ言われたら少しは参加しないと「丸投げか！」ってなるよ。

その後私は自劇団の公演などでご無沙汰したが、6月21日(土)久しぶりに覗いた稽古場は活気に溢れて実に風通しの良い「劇団」の稽古場。ストレッチから発声練習へと熱がこもって進んでいく。全員が愛称で呼び合って約一時間の体ほぐし、声慣らしが終わると座学が始まった。今日のテーマは「脚本は如何にして読むか、その読み方と方法、台詞は如何にして覚えるか」など、稽古実践に向けたG/9流芝居創造術である。

講師となった劇団員が仲間意識を強調した語り口調で展開した一部始終は……

台本(脚本ではない)の読みの順番として

- ① 黙読(文字どおり黙って読む)
- ② 音読(声に出して読む。ただしなるべく感情起伏をつけないで)
- ③ 平読み(稽古場で他の者と役を分けて読む。このとき、セリフを特定の者に向けて全体に向けて発声すること。対象を特定しないことで感情の起伏を押さえられ平たく読むことができる)

こうして読むことで、役に捕らわれずに台本全体の印象を掴むことができる。

この読みの段階でストーリーの雑ばくな掴みをし、役の設定をイメージする。要は固有の役に偏ってイメージするな、ってこと。芝居全体を捉えることを目指しているんですね、見習わなくては。

こう書いてしまうと、一方的に話を進めているように思われてしまうが、塾生に語りかけ、考え方や伝えたいことがどう捕まえられるか、を確かめながらゆっくりと進められていた。そこには一人一人の中にこれからの稽古進行にもっとも必要となる台

「風雲かぼちゃの馬車」

集まるべくして集まった 出会うべくして出会った
 全ては運命か 必然か
 自らを世に問うため あなたに変化を熾してみせる
 人生を揺さぶる 最大瞬間風速
 感情の最高到達点へ
 風雲かぼちゃの馬車 爆走す

コメディでシリアス。ロックでセンサイ。
 笑いあり涙ありのエンターテイメント。
 殺陣を多用し、言葉ではなく心で話す。

頭で考えるよりも感じるものに真実があると考え、熱い舞台をお送りします。

劇団の紹介

2005年12月、主宰、土井宏晃を中心として南瓜良成、永尾朱希と共に三人で旗揚げ。
 南瓜良成の書くオリジナル作品を中心に上演。演劇はエンターテイメントであるという考えのもと、ロック、アクションなどを多用する、疾走感とテンポの良さを重視した作品づくりを行う。
 劇場公演と平行して、路上パフォーマンス、Barでの公演など劇場以外の空間でも精力的に活動。
 2008年3月に行われた神奈川演劇博覧会における「鶯坂の決闘」の上演をきっかけに神奈川演劇連盟に加盟。
 劇団員の平均年齢が20代前半という、これからの期待がかかる注目の若手劇団である。

公演の記録

- 2006年 5月27日(土)、28日(日) 「チェスト寺田屋」
 シアターバビロンの流れのほとりにて
- 2006年12月13日(土)、14日(日) 「北越戦鬼無敗の敗残兵」
 町田市民フォーラム 3階ホール
- 2006年 3月～(不定期) 「ブルブル侍」
 路上パフォーマンス
- 2007年 7月21日(土)、22日(日) 「おかえり西遊記」
 下北沢 東演パラータ
- 2007年10月～(不定期) 「風雲かぼちゃの馬車 小作品集」
 下北沢Pirate Dining Bar 「Piece of 8」
- 2008年 3月22日(日) 「鶯坂の決闘」
 神奈川県立青少年センター・多目的プラザ

劇団員

主宰・演出・役者	土井宏晃
劇作	南瓜良成
舞台監督	永尾朱希
役者	菅本 生 眞野基範 遠藤 仁
音響	柴田直子
制作	田福晋也

劇団員募集

風雲かぼちゃの馬車では劇団員を募集しています。
 やる気のある方、元気な方、是非一緒にお芝居を創りましょう。
 入団希望の方はホームページからメールで、出演経歴書、または履歴書をご送付ください。
 また、お気軽に見学もどうぞ

お問い合わせ
 ホームページ <http://www.geocities.jp/fuun1223/index.htm>
 メール fuun1223@yahoo.co.jp



ポスター展開催

社団法人横浜演劇研究所は、日本と世界の演劇公演のポスターを蒐集してきた作品を一挙に披露されます。数回の展示会を行うことで、埋没されていた作品群を世に出すばかりか、絵画としての、表現としての作品を楽しむことも一興である

社団法人横浜演劇研究所は、日本と世界の演劇公演のポスターを蒐集してきた。

演劇のポスターは今日では写真が多く使われているが、かつては絵画が主流であった。世界の著名な画家もポスターのデザインを手がけていることは良く知られているが、そうした世界の演劇のポスターは、当時の演劇に対する期待、思いの強さを強烈に表現している。

そのアートとしてのインパクトは残念ながら今日のポスターの及ぶ所ではないと思われる。そういう世界のポスターを見ているうちに、これをそのまま保存するだけでなく、今日の多くの演劇関係者はもとより広く県民の目に触れる機会を作ることがとても大事なように思えてきた。

それは演劇に寄せる思いの強さとも比例すると思うので、これらのポスターから刺激を受けて、多くの人に期待される演劇を創造すること、ポスターの持つ強烈なインパクトに負けない演劇を世に送り出す活動を進める、ひとつの契機になるかも知れない。

また、日本の演劇ポスターについても、過去のものの方が強烈なインパクトを持っている。大きさの違いもある。今日ではポスターを掲示する所もなくなって、ポスターを作成する意欲すら喪失しつつあるが、ポスターの力によって演劇を広め売り込もうという強烈な主張をそこに見る。

そして、そういう作品の多くはやはり絵画によって表現されている。ポスターが力を持っていた時代ということも出来るのだろうが、演劇が生きることと同義語であった時代が生み出した作品とも言えるのだろうと思う。

こうしたポスターを見てもらうことで、演劇について熱い思いを語り合えたらいいだろうというのが、ポスター展を企画する原点である。

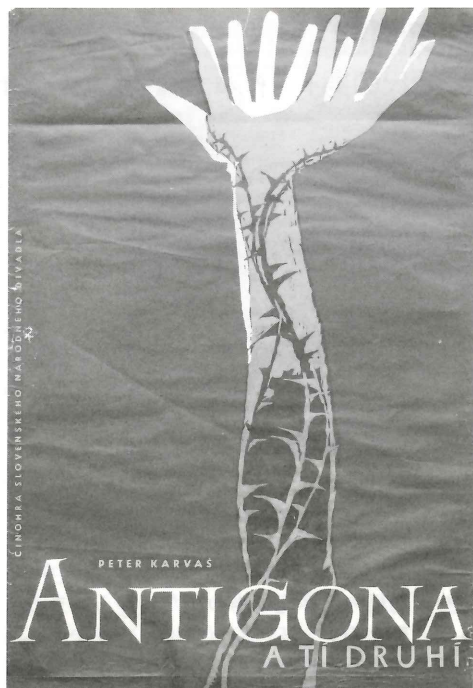
500点ほどのポスターを、海外編、国内編に分ける、或いは時代によって、劇団によって分けるなどして、数回の展示会を行うことで、埋没されていた作品群を世に出すばかりか、絵画としての、表現としての作品を楽しむことも一興である。

開室3年になる演劇資料室の存在が知れ渡るに従い、様々な資料が持ち込まれてきているが、演劇関係者にとってはこういう企画が生まれるのを待っている人も少なくない。演劇資料室が本の陳列だけでなく、演劇活動という生の人間を通して表現する芸術活動を、さまざまな形でサポートし盛り上げてきたその周辺に事業をもっとオープンにしていくことも求められていように思うのです。

まずは第1回のポスター展を開催するところから、それを始めたいと思うのです。

社団法人横浜演劇研究所が永年にわたり蒐集したポスター類を、広く県民に公開し演劇文化の推移を検証する。

蒐集初期の作品は美術的にも優れた作品が多く見るものの目を楽しませてくれる。多くは言葉が分からぬ作品であるが、演劇の楽しさを連想させる作品からは当時の文化の水準がはかられ楽しい。



開催概要

平成20年 9月10日(水)～平成20年 9月22日(月)

9月10日(水) 会場準備・ポスター展示準備

9月13日(土)～21日(日) 午前10時～午後5時 公開

開催会場	神奈川県立青少年センター 2F 多目的プラザ
主催	(社)横浜演劇研究所／神奈川県演劇連盟
実行委員長	馬場秀彦 (神奈川県演劇連盟事務局長)
実行委員	飯田克衛・横田和弘・山本忠利・荒井賢一
事務局	山元洋一・関口素実
会場担当	(社)横浜演劇研究所・神奈川県演劇連盟
共催	神奈川県立青少年センター

内容

第1回は海外のポスターを展示するところから始めたいと思う。収蔵された作品の中でも、とりわけアートとしてのおもしろさを見せてくれるし、こんな表現をしている、と見惚れてしまうこともある。系統的に、或いは万遍なく世界中の作品を集めたわけではないが、蒐集した範囲の中で、作品の詳細が分からないものも数多くあるが、ポスターの制作者たちが腕を競って描き上げた心意気を感じることは容易である。

第1回はそれで良いと思う。大まかな時代、作品名、上演国が分かればその時代の世界史の出来事を並べることで、何かが見えてくるようにも思うからだ。そして、ポスターの力、表現する深さ、期待感、演劇の可能性などについて、討論の出発点になったら、良いのではないかと思うのだ。

第2回以降は、第1回の展示会を総括する中で新しいテーマを見つけることが良いのではないかと考える。何しろ初めての試みであるので、とにかく大勢の人の目に触れてみて、どういう意見、感想が出てくるのか、それを見極めて、次の企画を速やかに始めたいと考える。

今回の展示ではポスターは40点ぐらいを展示し、次を匂わせる、日本の作品、もっと古い時代の作品群も参考として点ずることが出来れば尚良いのではないかと思う。

続いて1970年代から2000年頃までのヨーロッパを中心とした10数カ国のポスターを始め公演写真などと、同年代頃の国内の職業劇団の公演ポスター類、県内のアマチュア劇団が公演時の使用したポスター類を、年代、国、劇団などの類別に整理して公開することを考えている。

京浜協同劇団

「天空130尺の男」 作／和田庸子 演出／杉本孝司



京浜協同劇団の創立50周年記念公演「天空130尺の男」を、両国のシアターX(カイ)で観た。和田庸子さんの書いたこの作品は、2006年11月にも上演して高い関心を集めたが、今年、創立50周年を迎えるにあたり、更に作品

を練り直し、キャストにも川崎演劇塾、東京の演劇集団土くれ、などの協力を得て、東京芸術座の杉本孝司氏の演出で劇団の「スペース京浜」で5ステージ、シアターXで3ステージ、茅ヶ崎市民文化会館小ホールで2ステージと、計10ステージの舞台を繰り広げた。

舞台は川崎競馬場の馬券売り場のあたりから始まる。三々五々人が集まり、人びとのレースへの声援は、いつか75年前の川崎の工場地帯にスライドし、争議のまっただ中の工場の巨大な煙突の頂きの場面となる。そこには富士瓦斯紡績のストライキに赤旗を

2008年4月25日～27日 於：スペース京浜
5月17・18日 於：シアターX
6月7日 於：茅ヶ崎市民文化会館小ホール

振って支援の声を上げる若者がいる。直下の清掃員との会話から、その紡績工場の女工さん達の劣悪な労働条件が浮かび上がり、争議の意味を現代の観客に訴える。

和田さんは公演パンフレットの中で、1930年に起こったこの事件の特異さを次のように説明している。「当時人口10万の川崎で、その煙突下に1万人の大観衆を集め、日本はおろかアメリカやイギリスの新聞紙上まで騒がせたというわりには、かれの若い死についても真相は闇に包まれたままだ。いわば歴史の中に忽然と現れ、忽然と消えていった青年である。」と。

当時は世界的な大不況で、労働者は過酷な条件で働かざるを得ない状況にあり、煙突の下に現れる女工さん達の言動がそれを表現している。煙突の上と下との130尺(約40m)の距離を1つの舞台空間に示した舞台装置と演出の面白さが印象的で、それによって緊迫感が生まれて争議の印象が強く観客に伝わる。尤も今は争議ということの現実的な意味はわかりにくいかもしれないが、しかし、若い人はどうしても今の垢抜けた生活が身につけているから、女工さんなどを表現するのに、演出の苦労は大きかったのではないかと思わせたが、煙突男を演じた古木浩史さんは、純な青年を好演して観客を納得させ、この芝居の意味を強く訴えた。

[劇評：横浜演劇研究所 飯田克衛]

劇団きさく座

「お勝手の姫」 作／小川未玲 演出／高橋行恵

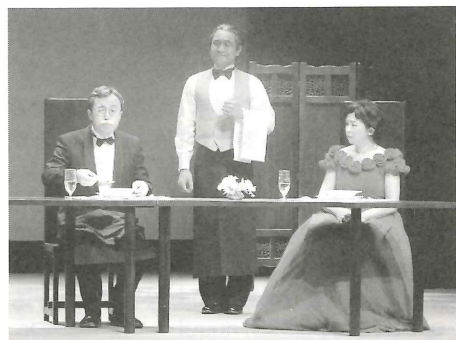
2008年5月26・27日 於：泉区民文化センターアトールフォンテ

初回を観劇させて頂きました。エレクトーンの演奏がとても心地良くレストランの雰囲気をかもしだしているお芝居でしたが、内容はその雰囲気とは似ても似つかない重苦しい気分で終始していったように感じました。適当に電話をして決めて来た見合いをする若い男女と、妻を姫と呼ぶ教授夫妻のコントラストと、本当は休業中のレストランで働く発音“フェ”を強調するウエイターと、どの人物も関係もはっきりとした個性を持って作者が書いた人物達が、芝居の中でどこかで争点をもって動き始めることを待っていた。が、最後まで動かなかった。お見合いをする若い女性の若くない感じも独特な間をかもしだすのを面白く感じたし、大人の芝居として十分楽しめたいいお芝居であったのだが、しかしだ、観客として減点せざるを得ないのだ、①芝居が動かない②争点が出ないのがやはり残念なところであった。又1回だけあった暗転の意味が理解できなかったことと一番最後の奥さんに発した言葉が良く聞こえなかったのがかえすがえすも残念。消えものについての処理はうまくいっていた。

劇場のつくりのせいか前の方に座っていたが全体にセリフがばたつかず、普通の生活のしゃべりに比べて小さい声のような気がした。だが現実こんな風景はあるのだろうか？ そういった意味で心象風景のお芝居のような印象を持ちました。いずれにしても一貫してやりきってしまうチームワークの良さは観客にいい印象を与えていたのは間違いないでしょう。

お疲れ様でした。又見に行きます。

[劇評：劇団蒼い群
村田次郎]



劇団河童座

「鬼の棲む館」 作・演出／横田和弘

2008年5月2～4日 於：相鉄本多劇場

いろいろな名作を下敷きにして醸された舞台だったが、知っていたのは毒薬と老嬢のみ。「よくこんなパロディを思いつくものだ」と感心しきりだったが、何となく未消化の部分も感じた。

強引に妻を追い返し、兄であることを秘して生家に帰ったが、一人暮らしの寂しい人と勘違いされて殺されてしまう男。自分を残して幸せの海辺の町へ出奔した父と兄を恨み、伯母たちが殺す孤独な一人暮らしの資金で幸せの町へ出て行くことしか見えていない妹。その妹を慈しみ「社会への慈善」と孤独な一人暮らしを解決(毒殺)してあげる伯母さん二人。

妹と伯母は、結果として事業(孤独生活者の救済)の完成まできて、自分たちが課した禁忌を犯したことからすべてが崩壊していく。兄は幸せな家庭生活者だったのだ。

幸せな生活から奈落へ突き落とされた兄嫁と、事業の完成を自らの手で行おうとして初めての殺人を犯しその罪の重さに潰されそうな妹は、兄嫁が抱く憎悪の関係をそのままに幸せの海の町へと連れ立っていく。

置かれた境遇を恨み解消のため伯母と協働した妹は悪鬼なのか。心ならずも緑の館を飛び出した過去の時間を取り戻そうとした兄の身勝手な贖罪は通じなかった。兄の善意のみが光るのか。

事の善悪に関わらず眼前の全てを受け入れ淡々と生を営む伯母たちは神の化身なのか。

それにもまして一言もなく唯々諾々と伯母たちに従う執事に、終わってみれば鶴匠のごとき操りを感じたり……。

ちょっと時間が経ってしまい辻褄の合わない印象が渦巻いているが、観劇直後はその構成された物語と、変わらぬ河童座(演技スタイルの違う共演者たち)プレイを楽しみました。

[劇評：劇団麦の会 山元洋一]



横濱世界演劇祭実行委員会 ドイツからタレイアスカンパニー

「レッドくんのもくようび」を招聘。みなと横浜演劇祭2008に参加上演。

3月22日(土)23日(日)3回公演
横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホールにて
上演毎回満席で終了

ラベル、ドビュッシー、ショスターコピッチの音楽に合わせて、透明の大きなキャンバスに絵が描き出されていく新しいスタイル。舞台には3m四方のアルミ枠に一枚の半透明のビニールが貼られている。パネルの下には色とりどりの絵具と大小の筆と刷毛。絵描きでもある俳優は開演前から繊細なイメージトレーニング。各章の案内役を神奈川県演劇連盟河童座の女優さんがゲスト出演。はじめは指さきについたぐらいの小さな赤い点。やがてレッドくんの旅はちいさな子どもから大人まで夢の世界に一緒に旅に連れ出してくれるやさしい暖かな夢のふくらむお話。クライマックスは雨にぬれた絵にダイナミックな太陽が出現する感動の舞台。終了後は観客も舞台上がり絵を交えて出演者とお話をしたり記念写真を写したり。興奮のさめないひと時となりました。

タレイアスカンパニー

1990年民間の専門劇団として設立。

1997年にはドイツのニュルンベルクに自前の劇場を設立。

次回の横濱世界演劇祭はデンマークから「ハムレット」。

三年越しになります「ハムレット」を予定し企画の準備を進めています。もちろん他のイベント等の状況や予算を考慮しながら。次回も楽しい横濱世界演劇祭が展開されるよう期待してください。

《団のぼる》



「レッドくんのもくようび」感想レポート

劇団河童座 村井彩子

音楽と、物語に合わせて絵を描いていくという、とってもユニークな舞台でした。普段観ることのない珍しい舞台に、参加させていただいたこと、とても誇りに思っています。前説と、観客への橋渡しとなる通訳係という、軽い気持ちで受けた当初の予想よりはるかに重要な位置に突然立たされてしまいましたが、それでも怒ったり泣いたりくじけたりできなかったのは、彼の描く絵が、あまりにも感動的だったから。

生まれて初めて目にした「物語が進んでいく絵」を、私以外誰も座れない特等席で、こどもたちの素直な反応を楽しみながら、3回も。そして贅沢なことに自分はその絵描きの方と一緒に舞台上に立ち、照明に当たり、出演させてもらったのだから文句を言える余地などありませんでした。

この舞台を、私の家族や友人、みんなに観てもらいたいと思いました。最後の完成された絵を写真で撮って見せたとしても、この素晴らしい半分の伝えられないことがとても悔しかった。やはりこの場に来て、生で観てもらいたいと、一

回の公演が終わるたびにそう思いました。

リハーサルでは絵を描かなかったので、本番まで、何が起こるのかよく分からずに、ただ自分の役目をちゃんと果たせるように、自分の言うべきことを何度も復唱し、初日の開演前はとてつもなく緊張していたのだけど、彼が絵を描き始めた瞬間から、こどもたちと同じように驚いたり笑ったり見入ってしまった。気が付いたら、緊張もほぐれ、とても安心して舞台上に立つことができました。

ラスト、キャンバスいっぱい太陽をぐるぐると描き、レッドくんが、その中でニコッと笑うのです。そのとき思わず生まれた温かい気持ちは今でもちゃんと思い出せます。多分、観客全体がそうなったことと思います。

まだどこかで彼らに出会いたい。そして願わくは、また橋渡しをしたい。

それまでに、少くく英語を話せるようになってほしいなあ。

～第1回県地域演劇春フェス報告(3/27 鶴見公会堂)～

“もっと自由に、もっと楽しく” 神奈川地域演劇春フェスを!

劇団ひこばえ代表 村上 芳信

これまでは演劇教育といえば俳優養成教育を指すものでした。もちろん演劇界では現在でもそのように考えるのが常識です。地域の時代となり<演劇づくり>を通して、<ひとづくり>、<地域づくり>を目的とする地域演劇が興隆してくるなかで、演劇と社会との関係が非常に注目されてきています。そのようななかで、すでに演劇教育も地域で子どもたちを育てる教育方法とまでなってきました。その背景には演劇と社会とのかかわり、演劇の社会的役割が強く意識化されているものです。

そのような社会的状況、演劇サイドからいけば演劇の社会的役割を具体的に実践するものとして、「神奈川県地域演劇交流発表会(略称 県地域演劇春フェス)」がこの3月に誕生しました。

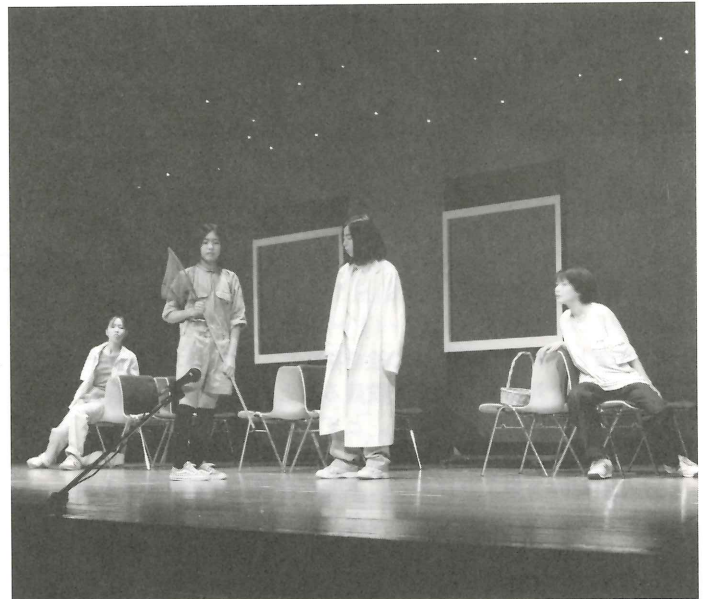
このような状況を具体化していく演劇教育と地域演劇の実践の場として、県地域演劇交流発表会(県地域演劇春フェス)実行委員会はさまざまな場で地域・学校、年齢の違いをこえて活動している演劇、ダンス、地域芸能の団体が、もっと自由に、もっと楽しく交流し発表をおこなえる場として準備したものです。結果的には10団体が実行委員会に参加し、9団体が発表をおこないました。

今回発表会名にタイトルのつけました“もっと自由に、もっと楽しく”には学校演劇など既成の演劇発表会にたいする批判的な意味合いがないわけではありませんが、むしろ発表内容をはじめ発表主体、組織、運営らにたいして開放的なものにしたという意義を含めたスローガンです。今回の発表では小学校の低学年で主に編成されるダンス集団から70歳の高齢者のシニア劇団までが参加した広がり、その一端を見ることが出来ます。また学校演劇と地域演劇とがいっしょに発表会で競いました。シアター発表会ということで苦し紛れの面もありましたが演劇、ミュージカル、ダンスと発表部門の豊かさもあげられます。(第2回では地域芸能部門も加わる予定です。)

これらの開放的なものにたいして、ご苦勞を一番おかけしたのは審査員の方々であつたらうかと思ひます。県教委教育長賞、県演連理事長賞、同奨励賞ともに審査基準がむずかしいものとなりました。運営上でも開放性がいろいろと検討しなければならない点が課題として残りました。観客は500名でした。

つぎに第1回神奈川県地域演劇交流発表会・2008スプリングシアターフェスティバルの参加団体と発表作品・演出名をあげておきます。

- 市民劇団湘南座・茅ヶ崎えぼし座・文教大演劇部
(実行委員会参加、発表なし)
- 劇団ジーバジーバ「すもうに勝ったびんぼう神」
作/松谷みよこ 演出/団のはる
- 劇団ひこばえ「祭りよ 今宵だけは哀しげに」
作/加藤純・清水洋史 演出/村上芳信・儀間鈴江
- 横浜市立荏田南中学校演劇部「Dreamrz」
作・演出/玉生夏実
- 横浜市立生麦中学校「演劇部 ビーナと愛」
作/深澤直樹 脚色/山田容弘
(県教委教育長賞の劇団ひこばえ演技)
- 青葉区小中高生ミュージカル有志「つながる祈り」
作/かめおかゆみこ 演出/井上弘久
- 鶴見区民ミュージカル春フェス制作委員会
「つるみ・公演ものがたり」作・演出/小川新次
- 川崎市立御幸中学校YOSAKOIソーラン同好会
よさこいソーラン演舞「御幸清龍侍」竹内右子
- 港北SAKURAロックソーラン舞踊団
ダンス「SAKURA」指導・振付/カネコキヨミ
- GET future ダンスユニット 振付/野崎美里



神奈川県演劇連盟加盟劇団の記録 (50音順)

- 京浜協同劇団 ●劇団蒼生樹 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座 ●劇団川崎演劇塾 ●劇団きさく座 ●劇団こゆるぎ座 ●劇団ひこばえ
- 劇団葡萄座 ●劇団麦の会 ●劇団横綱チュチュ ●横浜小劇場 ●劇団横浜にゅうくりあ ●風雲かぼちゃの馬車 ●ラ・テラ ●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>

DORAMA かながわ [第51号] 発行日: 2008年7月1日 発行: 神奈川県演劇連盟 編集: 安次嶺里絵子(劇団横綱チュチュ)